

「大学全人時代を迎えて」

第3回

現役学生が提案する
大学改革は!!足立寛 客員教授(総政)の
授業と提言

大学改革について現役学生はどう考えているのだろうか。おそらく無関心層が多いのが現状だろう。果たして無関心でいいのか。総合政策学部の足立寛客員教授は、「高等教育政策と大学改革」のテーマで、大学ブランドの構築、初年次教育・キャリア教育、新設学部学科の設置という三つの課題について、学生に改革案を発表させている。学生も中央大学の重要な構成員であり、改革の担い手であるという自覚を促すのがねらいだ。そこで「足立教室」の1日取材し、大学改革のあり方について足立客員教授にインタビューした。

学生記者 山崎綾香(法学部3年)／滝沢孝祐(総合政策学部4年)



11月24日「土曜1限」の総合政策部塔11400号室。この日は第2回目のプレゼンテーションで、テーマは「初年次教育・キャリア教育への改革案」。受講学生たちはABC3つのチームに分かれ、それぞれが一週間かけてつくり上げた改革案をパワーポイントに沿って発表した。キャリアセンターの職員3名も参加した。

◇Aチーム「求められるキャリア教育」

提案…学生の所属意識の強化が必要

大学業務の一部を学生に委託

トップバッターは「日本初年次教育政策委員会」ことAチームが、求められるキャリア教育について発表した。

まず、最近頻発する食品偽装問題などの背景には、社会的責任や社会への所属意識の欠如があるとし、その社会の一部である大学でも、学生が世の中を構成する一員として所属意識を認識すべきであると説いた。中央大学への所属意識から、より大きな社会を意識していこうというのが狙いだ。

そこで所属意識強化のための授業プログラムを考案した。柱は「知ってもらう」と「動いてもらう」のふたつ。

「知ってもらう」は、OB・OGなどのゲストスピーカーを招き、先輩方が中大で何を経験し、それがどう社会で活かされているか、について学ぶ。「動いてもらう」は、学生が中大を構成する一



「授業」に関する提案発表

員であるとの考えに立つて、大学側が実践型プログラムとして業務の一部を学生に委託する。例えば広報活動の一翼を担当、学生参加による授業カリキュラムの作成、学内イベントにおける企業スポンサーの獲得などが挙げられる、と提案した。

ただ、主体性や所属意識が低い学生たちをどのようにして、このプログラムに巻き込むかが大きな課題であるとし、それを克服するため大学側から学生への「提供の場」を提案。「例えば実務的スキルの向上を図るような、教える機会をつくることで本プログラムの魅力をアップし、学生に大

学業務運営に貢献してもらおう」と説明した。

足立教授は「方向性と、自分たち学生が主役と

いうアイデアがすごくいいね。あとはもう少し具体的に。結論だけ出すのではなく、KJ法によってこんな案も出たという過程を表すといいです」とアドバイスした。

◇Bチーム「初年次教育」

提案：文章作成、情報処理、口頭発表の能力つける

スタディ・スキルノートで基礎力を

初年次教育について考えたのは、「ピカチュウチーム」ことBチーム。

初年次教育の実際の現場では、何が必要とされているのか。チームの調査によると、学部長が学生に求めるものの上位3つは「レポート・論文の書き方などの文章作成法」「コンピュータを用いた情報処理や通信の基礎技術」「プレゼンテーションやディスカッションなどの口頭発表の技法」と、スタディ・スキルの割合が大きい。勉強する前の段階で身につけておく技術が、今の学生には不足しているというわけだ。

しかし、スタディ・スキル教育にはバラツキがあるのが現状で、先生によって力の入れ具合が異なり、内容にも不平等が生じている。学生の満足度は、不満が満足を上回った。

そこでBチームは、「みんなが同じ内容、最低限必要なことを学べるように」との考えで、スタディ・スキルノートの作成を提案した。

スタディ・スキルノートには、授業の受け方、



スクリーンを使って発表する学生

プレゼンの仕方、PC技術やマナーまで、社会人基礎力を含め大学で必要になるであろう能力・技能・態度が項目別にまとめられている。入学時に配られるキャリアノートとは違い、就職活動以外にも役立つ。

「学生の声を取り入れて年々改善されていくような、バランスの取れたノートを作成する」と発表者は締めくくった。

足立教授は「ノートという具体的発想がとてもいいですね。でも、問題は中身より使い方。関西大学ではこのようなノートを市販して売ったりもしています。他方、教員のための「教え方スタディ・スキルノート」があってもいいかもしれない」と

コメントした。

◇Cチーム「キャリア教育への改革案」

提案：「社会人基礎力」をつける授業

シンキング・チームワーク・アクション

Cチームもキャリア教育における授業を提案。まず、大学でキャリア教育を行うことについてSWOT分析を発表した。

キャリア教育はStrengths（強み）としては就職時に有利、社会マナーの理解など。Weaknesses（弱み）は受身になり勝ち、青春の犠牲など。Opportunities（機会）としてはキャ



キャリア教育をSWOT分析し発表

リアセンターの設置、インターシップ、売り手市場など。そして「Threats（脅威）」は能力主義の厳選採用、大卒新人離職率の増加などを挙げた。

中大ではキャリア教育の取り組みとしてキャリアデザインノートと自己発見診断テストを実施している。ただ、Cチームは「1、2年生にはピンとこない。そこで就職活動を迎える前に、その基盤となる能力を身につけることが重要ではないかと、社会人基礎力に注目しました」。

経済産業省は、社会人基礎力の3つの能力として「アクション」「シンキング」「チームワーク」を挙げている。

そこで、この社会人基礎力をつけるための授業を具体的に提案した。

第1に、他大学の取り組みを参考に、12回の授業を3項目各4回に分けて実施。1～4回は「シンキング」で、新聞購読によって現代社会を読み解く。新聞を読む習慣を身につけさせ、社会に興味をもたせる。

第2に、5～8回は「チームワーク」を課題に、興味ある業界分析を行い自分の将来を考える。「チームで調査・分析することで互いに気遣ったりするなど、社会で必要な力も身につく」という狙いだ。

第3に、9～12回は「アクション」で、ゲストスピーカーによる講演の企画運営をする。マナーや敬語を実践的に鍛える。

足立教授は「現状把握はリアリティがあったい

い。社会人基礎力とのリンクもすっかりできていく。ただ、キャリアデザインノートが必要としないという話と、授業提案とがしっかりリンクしていない」と課題を指摘した。

◇ ◇ ◇

単位とれない1年生も受講「自発的になる授業」と4年生

こうして1時間半があつという間に終わり、受講した学生に話をうかがった。

五味一成さん（1年）は、2年次からの授業なので、単位が取れないのを承知でこの授業を受けている。「教授に頼んで受講しています。とても



学生の発表を聞く足立教授

やりがいある授業です。神崎智大さん（4年）も「自発的になるきっかけをくれる授業です」と答えてくれた。他方、プレゼン

の準備期間が一週間というのはキツイという意見も。葛城一朗さん（2年）は「とてもやりがいがあるからこそ熱中したい。だからもうちょっと時間がもらえれば」と注文をつけた。

今回の講義に参加していたキャリアセンターの谷祐史副課長は、Aチームの大学業務の委託やCチームの授業提案などについて「内容によっては今すぐキャリアセンターで実現できるものもあります。今回の提案をかたちにするために、キャリアセンターは学生の主体的な行動を待っています」と学生の実行力に期待を込めた。



足立客員教授

足立寛客員教授に

「大学改革のあり方」を聞く

ティーチャー（教える人）から

ファシリテーター（促す人）に

——大学改革が言われるようになったのは、いつごろからですか？

足立 18歳人口が急激に減少し、学生の学力低下や志向の多様化が顕在化しました、ここ4〜5年でですね。とりわけキャリア教育が大学の中で急速に意識され始めました。「大学は教育の場だ」と10年前に発言したら、あ

る意味で馬鹿にされました。「リメディアル教育」は、最近でこそ多くの大学で行われていますが、一昔前は学外に公表などせずにこっそりとやるものでした。

様々な指標の大学ランキングなどが出てきたことで、社会が大学に対して偏差値以外にも新たな尺度を持ったことが大学改革のきっかけになったと思います。

——改革の必要性は、きちんと浸透しているのでしょうか。

足立 改革の必要性を最も認識しているのは、現場の先生方かもしれません。例えば一部の短期大学などでは、毎年入学する学生のレベルが下がっている。大学主人時代とは、そういう時代です。学生たちにどのように学びのモチベーションを持たせ向上させていくか。まずはささやかなことでも成功体験を積ませて、自信を持たせることから始めるそうです。このように先生方が変わらざるを得ない大学がある一方で、一部のブランド大学では先生方の認識は十分といえません。

それぞれ

足立寛（あだち ゆたか）客員教授プロフィール 昭和33年神戸市生まれ、57年関西大学文学部卒、平成15年桜美林大学大学院・国際学研究所大学アドミニストレーション専攻（修士課程）卒。ベネッセコーポレーション（旧社名：福竹書店）で、進研模試、進研情報、大学改革支援室など担当後、月刊Between編集長を経て、18年から中央大学総合政策学部客員教授。19年立教大学総長室調査役。

それぞれ

考えてもらう必要があります。講義を聞くという受身の行為に慣れた学生たちに対して、能動的な姿勢を促す講義はどうあるべきなのか。それを先生方が模索していくべきではないでしょうか。

——教え方を工夫する必要があると…。

足立 研究の成果を単に伝達するだけの講義はもう通用しません。どのように創意工夫を凝らし、学生の人間の発達につなげられるかを工夫することが必要です。例えば、講義の中にワークショップやフィールドワークの手法を取り入れるなど、



インタビューにこたえる足立客員教授

工夫の方法はあると思います。

また、学生に対してレポート課題を与えるにしても、「レポートを書く」行為を通じて学生をどのように成長させるのかを考えることが必要です。また、社会人基礎力として掲げられている「チームワーク力」、「働きかけ力」などを養うためには、講義をどう展開すべきか。そういった工夫が必要でしょう。先生方はティーチャー（教える）だけではなく、ファシリテーター（促す人）としての資質が問われています。

教職員一体となった改革が必要 客観的意見に終わらせず行動につなげる

——「社会人基礎力」の必要性が言われています

すが、「一人前の社会人」とはどのような人間を指すとお考えですか。

足立 難しいですが、自分の力でPDCAサイクルを回せる人ではないでしょうか。自分の中で、計画、実行、反省、もう一度挑戦という流れを作り、実行できる力が求められていると思います。

——大学の教員と職員では「改革」に関する意識が違うと思われませんか。

足立 その違いを端的に表している言葉に、職員が使う「先生方」という言葉と、先生が使う「事務方」という言葉があります。「先生方」とは個人の集合体を表すのに対して、「事務方」とは「事務をやっている組織」を指していると思います。つまり、事務職員の顔が見えていません。こういった意識では改革が進みません。もっと教職員が一体となつて改革を進める必要があります。

先にも述べたように私は大学の主たる役割は教育だと考えていますが、従来は職員が教育に対して口を挟むことは難しかった。しかしながら、職員が教育に対して発言権を持つような組織体系に変えている大学が増えています。

例えば京都産業大学では、学部の事務長に相当する役職を「事務長」ではなく「学部長補佐」と呼んでいます。従って、学部長補佐と呼ばれるスタッフは、教授会での発言権も持っています。先生方がどのような教育をしているのか、一番知っているのは職員ですからね。

——内側からの改革は難しいこともある。客観

的意見が言える外部人材の活用もひとつの手ではないでしょうか。

足立 私もかつてはそう考えていましたが、大学の世界に入り考え方が少し変わりました。外部人材が必要なことは確かですが、客観的意見のままで終わらせるのではなく、学内事情も考慮しつつ実際の改革につなげられる能力を持った人こそが、学内に必要です。例えば募集広報戦略など広告代理店が提案したものを、学内の状況に合わせてブラッシュアップして、「これでやる！」と実行できる能力を持ったスタッフが必要なのです。

目が輝く学生をどれだけ増やせるか！

学生と教職員による「共創」時代

——大学の教職員が意識を揃えて向かうべき目標とは何でしょうか。

足立 青くさい表現かもしれませんが、「学生の目の輝き」を求めることではないでしょうか。4年を経て卒業したときに、「ありがとうございました。この大学で学んで本当に良かったです」と、握手を求めてくれる学生をどれだけ増やせるか。それこそが目標ではないでしょうか。

——大学は学生に対してサービスを提供するといふ考えは？

足立 確かにそういった発想もあると思いますが、改革に熱心な金沢工業大学には、カスタマーサテイスファクション（顧客満足）室という組織があるほどです。ただ、私はそうした考えとは異

なりません。

学生はお客様ではなく、大学の構成員です。そもそも学生が「自分はお金を払っているのだから」という意識を持ったら、学生と教職員との関係は崩壊するのではないのでしょうか。学生も自ら努力する必要があらぬと思いませんし、もし努力するよう促しても変わらない学生がいれば、それは本人の問題でしょう。学生たちも構成員として大学改革にもっと関与していくべきです。

——学生と教職員が三位一体になるということですか。

足立 これまでの大学を振り返ると、大学と学生の関係性は時代によつて大きく異なりました。1960年代のいわゆる全共闘時代、大学と学生は敵対関係でした。それが過ぎ去り70年代に入ると頃になると学生は大学に対して何の期待もせず、入学できたらひと安心という時代でした。現在は「共創」時代だと考えます。つまり教職員と学生が、大学を共に創る時代なのです。

「勉強できる環境」を受験生にアピール 多摩Cの学部集積メリットを活かす

——中央大学は駿河台から多摩に移転してまもなく30年。学生からは「こんな田舎に」という声もありますが、逆に多摩に立地するメリットは何でしょう。

足立 自然環境に恵まれている（笑）。このような環境に囲まれているからこそ、しっかりと勉

強できるのではないのでしょうか。そもそも、「きちんと勉強したい人」を受験生獲得の明確なターゲットとして設定すべきではないでしょうか。

例えば繁華街の近くにある都心の大学が、「炎の塔」を建てても、ほとんど誰も来ないと思いません（笑）。中途半端に「都心から何分」とPRするのではなく、割り切ることも必要かと思っています。私が担当する講義の中で、学生たちに対して中央大学の入試広報策を検討させたことがありました。その時にある学生が、「中央大学はまじめな大学です」と社会に訴えていくべきではと言っていました。学生はよく見抜いているなど思いましたよ。

——中央大学は文系の全学部が多摩で4年間学んでいますが、このメリットは。

足立 FL Pのような学部横断型プログラムが実現可能なのは、そうした学部の集積が故だと思います。こうした点も、きちんとアピールしていくべきです。中央大学に限らず、どの大学も「自分の大学の宝物が見えていない」のです。個々の先生が工夫しても、当人にとつてそれは当たり前だと思つているから、良さに気がつかない。だからこそ、つねに学内の取り組みを客観視して相対化することが必要です。

——団塊の世代に狙いをつけてはどうでしょう。
足立 私が職員として勤めている立教大学では、来年から立教セカンドスクール大学を開設します。言うなれば、1年間のシニア大学ですね。私も設

立に多少関与させてもらっていますが、「もう1回母校の思い深いキャンパスで学び直したい」という卒業生の思いは強い。その場合は、体力的にも自宅からの交通の便が良いことが若者以上に必要な条件となりますが：（笑）。

ただし、中央大学が立地する多摩地域のニュータウンにも団塊の世代を始め、多くのシニア層の方々が住んでいます。卒業生だけではなく、そうした方々の需要を掘り起こせばいいのです。

——2年間、講義を担当した感想は？

足立 学生の発想は素晴らしいと思います。「これまで、大学のことを考えられるのか」と感動を覚えることもあります。そうした一方で、なかなか行動に踏み出せない学生が多いことも事実です。つまり、やるべきことはわかっているのに、どこからどのように始めればいいのかかわからない、またはわかっていても、失敗するのが怖くてチャレンジしようとしません。例えば、私は前期ではキャリア教育の科目を担当しましたが、インターンシップの重要性は理解していても、自らインターンシップ先を探そうとはしない学生が何人かいました。

また、私の授業ではゲストスピーカーの方を多く呼びますが、後期の授業では何人もの職員の方にお願ひしています。そうした点は我ながら画期的だと思つています。職員がご自身の言葉で、大学の状況や自らの仕事を話すことが、学生にとつても新鮮な印象を受けるようです。